

いちようびょう 萎凋病

病原菌名 *Fusarium oxysporum* f.sp. *lycopersici*

発生条件

比較的高温時に発生しやすい。施設栽培では9～11月や3月下旬以降に発病することが多い。露地栽培では梅雨明けの7月頃から発病が多くなるが盛夏期には少ない。被害茎葉、根とともに土壌中に残った厚膜胞子(耐久性のある胞子)は、5～15年生き残ることができる。病原菌の分生子は空気中を飛散し、伝染源となることがある。



根や茎の維管束は褐変している。茎の維管束の褐変は比較的高い位置まで認められ、症状のみられる複葉あたりまで褐変していることが多い。



はじめ下葉が黄化して萎れ、葉柄が垂れ下がる。のちに茎葉は枯死する。被害が軽いときには、半枯れ症状を呈することもある。